

(9)

オピニオン

(第3種郵便物認可)

一人の老女が亡くなった。享年104歳。同年の生まれには作家の太宰治や中島敦がいた。9歳年上の兄がいて、その兄は東京帝国大学法学部を卒業後内務省に入省した。

女には、どこか身体の奥深くにしみ付いた習性のようなものがあった。それは、戦後、生活が変わっても、老いて年金生活になっても変わらなかった。玄関に置く生け花は、買うことができなかった。庭で栽培し飾った。それが女の考える「普通の生活」だった。

小学校へは、芥川龍之介が「羅生門」を出版した年に入学した。勉強はできたが、それほど好きでもなかった。後年、孫に語った。女は女学校卒業と同時に結婚する。相手は、同郷で女の兄と同じ東京



やまもと たろう
山本 太郎

老女の一生

そんな女が「あの時代はよかったです」と話していたのが、終戦までを過ごした門司での生活だった。社宅を2軒借り、1軒は自宅用に、1軒は朝鮮や中国に渡る知人や親戚たちが、半島への連絡船を待つ際や、半島からの帰りに立ち寄った。すき焼き用の牛肉や酒を提げた客半島や大陸にある高校受験のために立ち寄ったおいつ子たちが、長い者は1カ月、2カ月と滞在した。

くした。結核で両親を亡くした兄弟の子を育てた。当時、家族の一人が結核になると、看病をする家人も結核に倒れ、結果として、一家が行き倒れるという悲劇が多く見られた。

そうした生活も昭和30年代半ばには終わる。次男は東京へ、育てた子どもたちも家を出た。昭和40年には夫が亡くなった。前年に東京五輪が行われた年の暑い夏のことだった。以降、50年、女は一人で田舎に暮らした。その間に、孫が8人、ひ孫が15人生まれた。玄孫はまだいない。時々訪ねて来て「おばあちゃん、昔の生活はよかったんでしょ」と聞く人に女は「今が一番いい」と答えていた。女は私の祖母にあたる。
(長崎大学熱帯医学研究所教授)

の大学を卒業した男だった。親が決めた相手だった。「当時はそれが普通だった」と女は語った。想像するしかないが、幸せでも、不幸せでもない結婚生活だったと思う。

生活を変えたのは戦争だった。海峡封鎖のために上空から次々と投下される機雷の長く尾を引く光を女は幾度も見上げたという。戦後、混乱のなかで、長男を亡